

森のちやれんがニュース

2021 秋

北海道博物館
HOKKAIDO MUSEUM

Newsletter vol.25



特別展『あっちこっち湿地～自然と歴史をめぐる旅～』を開催 オンラインコンテンツも充実

湿原・沼・川・湖・干潟…北海道は湿地の宝庫です。この展示会では、湿地で見られる鳥や魚、昆虫や植物、そして幻になった生き物たちを紹介するとともに、今では大部分が失われてしまった石狩大湿原など、自然と人の関わりにも焦点を当てました。

また、新たな試みとして、感染症対策と体験学習を両立した「フットオン展示」（足でさわって楽しむ展示）を取り入れました。足でスイッチを押して生き物の鳴き声を聞いたり、浮島を歩く感触を体験したり…楽しい仕掛けが盛りだくさんの展示会でした。

感染症拡大による博物館休館にとともに、この特別展も長期間休止になってしまいましたが、少しでも皆様に湿地について伝えられるよう、ウェブサイトでも湿地関連コンテンツを配信しました。引き続き公開しますので、当館のウェブサイトをチェックしてみてください。（学芸員 田中祐未）



あっちこっち湿地
×
おうちミュージアム



CONTENTS

- ② 収蔵資料紹介
採録資料「小川」シゲノさんのお話
- ③ 総合展示紹介・第2テーマ 映像資料「踊り」より
鶴川に伝わる踊り「フッサヘロ」
- ④ 研究活動紹介
天然記念物 渡島大島の調査(速報)
- はっけん広場 秋の活動報告
「羊の毛、洗っています!」
第18回企画テーマ展(予告)
「アイヌのくらしー時代・地域・さまざまな姿」の開催
- アイヌ民族文化研究センターだより
・「アイヌ民族の歴史と文化ー(ひと)〈もの〉〈ことば〉からさぐるー」連載中です
・第5回特別展「アイヌ語地名と北海道」の連続講座・特別フォーラム講演記録を発行します
- ⑦ 活動ダイアリー
2021年6月～2021年8月の記録

収蔵資料紹介

採録資料 「小川シゲノさんのお話」

大谷 洋一

アイヌ文化研究グループ 研究職員

今回紹介する資料は、1996年から2002年までの間に平取町貫気別生まれの小川シゲノさん（1921～2010）から私が録音した資料15点についてです。これらは北海道博物館の図書室において全て公開中です。



■小川シゲノさん（鈴木まり子氏提供）

小川さんは近隣に住む人たちに起きた災いや病気の原因を占う巫女として地元で活躍し、日常的にカムイ（神）へ祈るアイヌ女性の一人でした。調査当初の小川さんは物語の録音は許されましたが、信仰についてはためらいを見せました。特に、カムイに関することを話すのは、厳格な父親から強く戒められていたと言います。たとえば「二風谷アイヌ語教室広報誌第39号」（1995年11月発行）の取材で小川さんは「父親はパウエトク（雄弁、話し上手）だったけど、よく『エトラカイク アシトマフ（いいかげんな言葉はおそろしいものだ）』と語ったと話しています。そんな想いがあった小川さんは、録音されてもよい話題を自ら選択して話されていたのです。

小川さんが語るウエペケレ（散文説話）は多くの日本語が混ざっていますが、カムイユカラ（神謡）というジャ

ンルはアイヌ語で語り通します。これは個々の物語で定まっているメロディーに乗せて演じるカムイユカラの方が鮮明に記憶されやすかったのだろうと推測します。

カムイユカラは、怠け者がカムイから罰せられて月に送られた話、鳥たちの宴会で酔ったカラスが醜態を晒した話、ポイヤウンペ（英雄叙事詩の主人公）からアイヌの村を守るように諭されたオオカミの話の3編があります。

ウエペケレの方は他では聞けない内容のものが多く、ギョウジャンニクのカムイに養われた男の話、山でクマに遭遇して赤ちゃんを置き忘れて逃げた女の話、ヤナギとナラの木の会話を聞くことで病人を救えた女の話、ソロマ（コゴミ）という言葉を恐れた伝染病のカムイが村に近づかなかった話、人食い山男の燃えた灰がアブになって今も人の血を吸うという（白老という地名由来）話、夜盗に襲われて両親を失ったが白のカムイに救われた男の話、川下の者と川上の者が体験する滑稽話などの12編があります。

小川さんは、よく私に「なんでも聞いてコチャヌアコロ（参考になる）すれ」と言いました。皆さんのアイヌ文化・アイヌ語の学びにつながる小川さんのお話を当館の図書室に来てぜひ聞いていただければ、と切に願う次第です。

小川シゲノさんの公開資料一覧

No.	公開資料番号	採録年月日	略内容
1	CC800001	1996年7月25日	ウエペケレ2編、カムイユカラ1編
2	CC800022	1996年9月25日	ウエペケレ1編
3	CC800206	1996年11月21日	ウエペケレ1編
4	CC800024	1996年12月22日	ウエペケレ1編
5	CC800208	1997年2月27日	ウエペケレ2編
6	CC800233	1997年4月25日	ウエペケレ1編
7	CC800234	1997年7月12日	ウエペケレ1編
8	CC800235	1997年9月25日	アイヌの食事について
9	CC800236	1997年9月25日	アイヌの食事について
10	CC800237	1998年8月8日	アイヌの食事について
11	CC800238	1999年4月27日	ウエペケレ1編、カムイユカラ1編
12	CC800209	2000年1月29日	ウエペケレ1編、カムイユカラ1編
13	CC800207	2000年5月27日	ウエペケレ1編
14	CC800210	2001年5月27日	穂別に歩いて行った時の思い出
15	CC800239	2002年6月21日	苦労話、短い祈り言葉



■公開用CDは当館の図書室で聴けます

総合展示の資料紹介・第2テーマ

映像資料「踊り」より
鵜川に伝わる踊り「フッサヘロ」

甲 地 利 恵

アイヌ文化研究グループ 研究主幹

総合展示第2テーマ「アイヌ文化の世界」に「見て 聞いて アイヌ文化の世界」というコーナーがあります(写真①)。

「見て 聞いて アイヌ文化の世界」には大きなモニター1台と小さなモニター2台があり、大きなモニターではいろいろな物語や歌・踊り・楽器などの実演を紹介する、それぞれ1～2本(1分程度)の映像を見ることができます。

この記事では、大きなモニターのプログラム「2 踊り」から、「鵜川に伝わる踊り「フッサヘロ」」を取り上げ、踊りとともに歌われるメロディの重なり方に着目してみます。



写真①「見て 聞いて アイヌ文化の世界」コーナー
写真②～④「フッサヘロ」の映像より

「鵜川に伝わる踊り「フッサヘロ」」は、『国際先住民の10年 アイヌ民族文化祭 ダイジェスト版～ヌヤン・ヌカラン・ピラサレヤン～』* (北海道アイヌ古式舞踊連合保存会製作、VHS、2006) に収録されている映像で、第13回アイヌ民族文化祭(1999年開催)で上演されたものです(写真②)。

*当館の図書室でも視聴できます。

「フッサヘロ」では、座った踊り手数人と、その背後に立つ踊り手が登場します。

座っている人は少しかがんで床を手のひらで軽く触れるような動きを繰り返します。その間、立っている方は座った人の背後から肩に触れる動き(写真③)を繰り返したあと、やや強めに床を踏みしめながら反時計回りに進みます(写真④)。

伝えられるところによれば、座っているのは病人の役で、立っている人は病人の背後から病魔を祓うため「フッサ」と呼ばれるまじないの動作を行っているのだとされます。

「フッサヘロ」は、こうした“お祓い”の場面を模した踊りとして、鵜川アイヌ文化伝承保存会を始めとする鵜川地域の人びとにより、大切に伝えられています。

さて、「フッサヘロ」の映像を見なが

ら、歌の旋律に耳を傾けると、「フッサヘロ」「カンコワ ホーテルケ」という2種類の歌詞を、違うメロディで同時に歌っていることに気づくでしょう。立って踊る人が「フッサヘロ」を2拍で歌って3回繰り返すあいだ、座っている病人役の人は「カンコワ ホーテルケ」を3拍で歌って2回繰り返します。それぞれ合計6拍でちょうど1セット(下の図や譜面をご参照ください)。これを何度も繰り返し歌うのに合わせて、踊りも進んでいきます。

このように、拍のまとまり方が異なる2種類のメロディが同時進行するという構造は、アイヌの伝統的な音楽の特徴の一つと考えられます。

…と、言葉で説明すると、なんだかとても複雑に思えるかもしれませんが、まずは総合展示室にお越しになり、この映像をとおして、2種類のメロディが重なりながら進む全体を、踊りの動きとともに味わってみてください。

どちらかのメロディを、映像に合わせていっしょに小声で口ずさんでみると、もう一つのメロディとの絡みが実感できていっそう分かりやすいかも。(周りに他のお客さまがいない時に)ぜひお試しを！

「フッサヘロ」の2つのメロディの重なり方

フッサヘー	ロ	フッサヘー	ロ	フッサヘー	ロ
カン	コワ	ホー	テル	ケ	

♩ = 30～40

フッサヘー ロ フッサヘー ロ フッサヘー ロ

(1) (2) (1) (2) (1) (2)

カン コワ ホ テル ケ カン コワ ホ テル ケ

(1) (2) (3) (1) (2) (3)

※ 図と譜面は映像資料をもとに甲地が作成。図・譜面のアイヌ語は映像での発音に近い音で記した。(1)(2)(3)は拍を示す。

研究活動紹介

天然記念物 渡島大島の調査(速報)

圓 谷 昂 史

研究部自然研究グループ 学芸員



1988年、札幌市生まれ。北海道教育大学大学院修了。2013年より当館学芸員（担当は地学）。写真は、北海道内の海岸で調査した様子。

た台風8号の接近で悪天候が続き、4日間の足止めを喰らいましたが、ようやく5日目に出海することができました。島までは、片道3時間の道のりです。船はなかなか揺れましたが、島が近づいてくると、いよいよ上陸できる、という期待に胸が膨らみました(図2)。

いざ調査！

本調査の目的は、本島の動植物を主な対象として基礎データを蓄積するこ

はじめに

「渡島大島に調査に行きます」と話をすると、ほとんどの場合「どこにあるの？」という質問が返ってきました。確かに、奄美大島や伊豆大島といった観光地と比べると、知名度は高くないかもしれません。しかし、渡島大島は、海底火山の噴火によってできた火山島であり、周囲の島々とは海で隔てられており、また現在は無人島であることから、独自の自然環境を見ることができる国内でも貴重な場所なのです。

ここでは、2021年7月30日（金）に実施した、北海道博物館初となる（旧北海道開拓記念館を含む）、渡島大島の調査の概要をご紹介します。

近いけど遠い渡島大島

渡島大島(以下、本島とする)は、北海道南部にある渡島半島の日本海側、西方約50km沖合に位置しています(図1)。本島は、海鳥であるオオミズナギドリの北限の繁殖地として、全域が国の天然記念物に指定(1928年3月24日指定)されるなど、自然環境の保全のため特別な規制が設けられています。上陸はもちろんのこと、島内で活動をするためには、関係省庁などから許可を受ける必要があります。今回の調査は、1年以上前から計画を立て、さまざまな準備と調整を重ねてきました。また、通常離島を訪れる際には、定期便の船

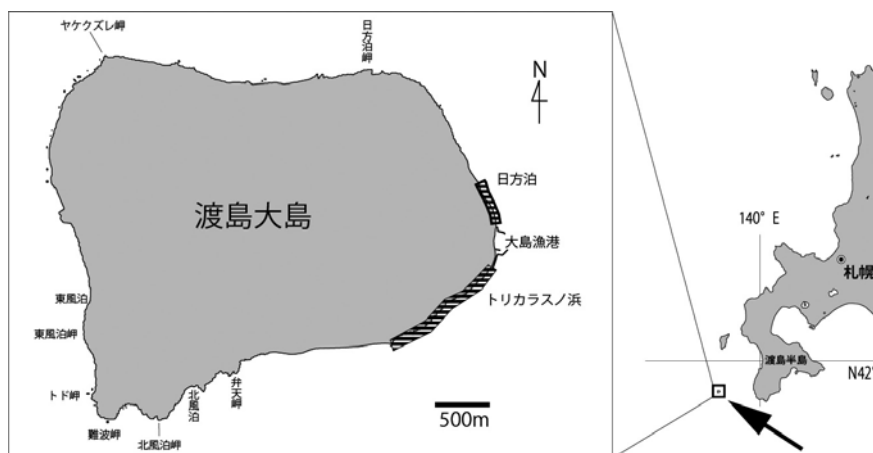


図1 渡島大島の位置(網掛け部分は調査範囲)

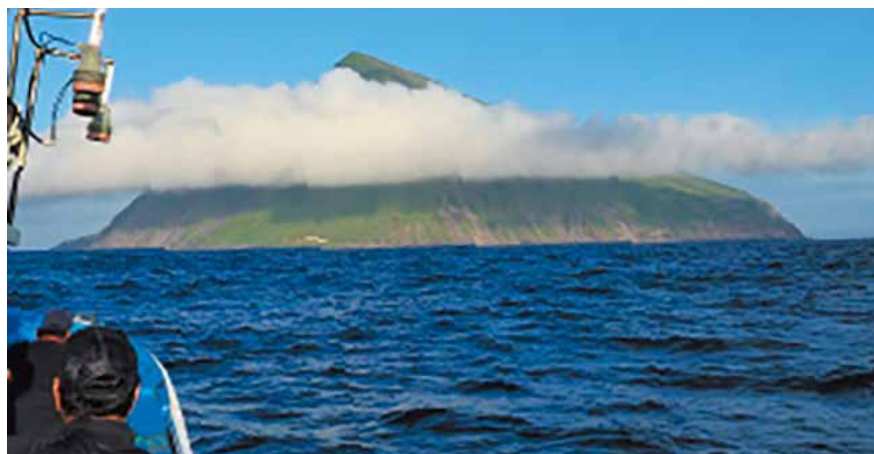


図2 上陸前に船からみた渡島大島

船や航空機を利用することになります。本島への定期便はなく、船をチャーターする必要もありました。これらの準備が整っても、簡単に上陸はできません。島に渡るためには、気象条件(特に、風向きと波)に恵まれることが重要です。今回は、調査直前に発生し

とです。島での滞在時間は8時間余りと、必要十分な調査時間ではありませんでしたが、当館の堀繁久学芸部長(昆虫調査)、水島末記学芸主幹(海岸生物調査)、鈴木あすみ学芸員(鳥類・哺乳類調査)の4名で上陸し、調査を実施しました。



図3 海岸の様子(トリカラスノ浜)



図4 採集した貝類(カサガイの仲間)



図5 漂着した海洋ゴミの様子(トリカラスノ浜)



図6 島の北西側(ヤケクズレ岬)の様子

私の調査対象は、①潮間帯に生息する貝類、②海岸に流れ着いた海洋ゴミの2つでした。調査範囲は、島の東側海岸になります(図1)。海岸には断崖が迫っており、平地はほとんどありません(図3)。大きな礫がゴロゴロとして足場が悪く、重たい道具を背負いながら、30℃を超える炎天下での調査は想像以上に過酷でした。

まず、①の貝類調査では、波打ち際の岩や礫に付着する貝類と、海岸に打ち上げられた貝殻を採集しました(図4)。その結果、十数種類を確認することができました。これまで私は、日本海北東部域の離島(北海道日本海側の奥尻島、天売島、焼尻島、利尻島、礼文島、及びサハリン島日本海側のモネロン島(海馬島))の海岸で調査を実施しました。これらの地域は、日本海を北上する対馬暖流の影響により、生物の南限と北限が混在する地域となります。また近年では、これまで確認され

ていなかった、より南方の海域に生息する暖流系貝類も発見されています。今後、調査結果を基に比較・検討することで、本地域の生物地理などを明らかにしていきたいと思います。

次に、②の海洋ゴミ調査では、海岸に流れ着いたものの撮影と計測を行いました。ペットボトルを中心とした飲料容器、破片化した発泡スチロールが多くを占め、漁具なども確認できました(図5)。また、これらに印刷されたバーコードを調べると、日本製品を主体に、中国、韓国、ロシアなどの近隣諸国をはじめ、マレーシアやベトナムの事業者が製造したものも含まれていることがわかりました。近年、世界的な環境問題として海洋ゴミ(主に、プラスチック製品)が取り上げられています。海洋ゴミの種類や量を把握することは、海洋ゴミ問題解決にむけた貴重なデータとなるので、調査結果をしっかりとまとめたいと思います。

あっという間に時間は過ぎ、調査は終了となりました。北海道に向かう前に、船で島を一周する機会にも恵まれました。これまで見たことのない独特の景観を各所で見ることができ、地形や植生の無いむき出しの山肌は、かつての火山活動を感じさせてくれました(図6)。

おわりに

今回の渡島大島の調査は、とても貴重な機会となりました。本稿は速報のため、それぞれの調査結果の詳細をお伝えすることはできませんでしたが、別の機会で報告したいと考えています。

なお、本調査は、新型コロナウイルス感染症対策を徹底し、関係者の皆様のご理解とご協力をいただく形で実施しました。ご協力をいただきました関係者の皆様には、この場をお借りして心より御礼を申し上げます。

はっけん広場 秋の活動報告

羊の毛、洗っています！

子供たちの賑やかな声が懐かしい今日この頃…皆さん、お元気でしょうか？ 現在、「はっけん広場」は新型コロナウイルス感染予防のため、お休みしています。いつも、ここではイベントの様子などをご紹介しますが、今回は「はっけん広場」のイベントの準備作業を紹介します。

毎年、春恒例といえば、「羊毛洗い」の仕事があります。イベントで使用する羊毛は、毛刈り後、毛を洗うところからはじまります。今年も新得町の畜産試験場から4頭分の羊毛が大きなビニール袋に詰められ、届きました。まず、袋から取り出して広げ、汚れている毛を取り除きます。何とも言えない



写真1 羊毛の汚れ取り

香りが漂う中での作業です。その後は、数日間かけて少しずつ丁寧に洗っていきます。乱暴に洗うと毛が固まってしまうので、優しく、丁寧に洗うのがコツです。毛に絡まった泥や草の汚れを見ると、草むらでたくさん遊んでいる羊たちを想像し、微笑ましく思います。この後、濯ぎ、脱水をすると、汚れて茶色だった毛がびっくりするほど真っ

工 津 尋 美

学芸部道民サービスグループ 解説員

白に！ これを広げて干し、乾燥させると洗う作業は完了です。

今回の羊毛は、どんな作品に変身させましょうか？ 温か味のある羊毛の作品づくりは、子どもから大人まで、とても人気があります。現在、楽しい作品の作り方を考案中です。「はっけん広場」が再開した時は、ぜひお立寄り下さいね！



写真2 今までつくった作品

企画展予告

「モノ」を通して、それを作り出した人びとの暮らしを見つめ直す

第18回企画テーマ展

「アイヌのくらしー時代・地域・さまざまな姿」開催

大 坂 拓

アイヌ民族文化研究センター 学芸主査

10月16日から、第18回企画テーマ展「アイヌのくらしー時代・地域・さまざまな姿」がオープンします。この展示は、公益財団法人アイヌ民族文化財団が毎年実施してきた「アイヌ工芸品展」事業によるもので、当館での開催は平成23年度の「千島・樺太・北海道アイヌのくらし」以来、10年ぶりとなります。

今回の展示では、資料選定の段階から、地域や時代、可能であれば作り使っていた人びとがハッキリしている「モ

ノ」を集めることを心がけました。これまで、アイヌ民族の作り出した民具は、残念ながらバックデータがハッキリしないものが多いと言われてきました。しかし、作り手や使い手が分からない資料だけを並べてしまうと、その感想は端的に言って、「ああ、奇麗だなあ」、「こんな道具があったんだなあ」と

いった漠然としたものに終わってしまいがちです。

バックデータがある資料を起点として、それらがどのような時代の中で、どういった人物により作り使われ、いかなる経緯で博物館に保管され、遺族は今その資料についてどう思っているのかを伝える。今回の展示のテーマはここにあります。多くの方々にご来場いただき、アイヌ民族の過去から現在へのあゆみに思いを馳せて頂ければ幸いです。



写真1



写真2

写真1

沙流地方の口承文芸伝承者として著名な平目カレピアさん（1934年撮影）。写真2の着物を着用している。当時の機材では屋内での撮影が難しかったため、屋外に道具を持ち出す演出が加わっているものと見られる。

写真2

カレピアさんが着用していた着物。写真1が撮影された翌年には手放されていたようで、現在は北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園・博物館に所蔵されている。

アイヌ民族文化研究センターだより

■「アイヌ民族の歴史と文化 —〈ひと〉〈もの〉〈ことば〉からさぐる—」連載中です

国土交通省北海道開発局の関連団体である一般財団法人北海道開発協会(札幌市)は、関連する事業に関する情報発信などを目的とした広報誌『開発こうほう』を毎月発行しています。この『開発こうほう』で、連載「アイヌ民族の歴史と文化—〈ひと〉〈もの〉〈ことば〉からさぐる—」が始まっています。

2020年に民族共生象徴空間・国立アイヌ民族博物館が開設される等、国や道の施策が進められている一方で、最新の調査でも、社会の中でのアイヌ民族の歴史や文化についての理解は十分ではないことが指摘され、現在もいわれている偏見などが見られます。今回の連載は、北海道開発協会から当館アイヌ民族文化研究センターに依頼をいただいたもので、上記のような現状と課題を踏まえ、歴史と文化に対する理解と認識を深める一助になればと企画しました。

第1回と第2回は、幕末から明治・大正・昭和の札幌の人々に着目しました。

○これまでの掲載(入稿済みを含む)と執筆者

- 1 694号(2021年6月号) 札幌からアイヌの歴史を考える—中央区北3条西7丁目の20世紀—(小川正人)
- 2 695号(7月号)「札幌市民第一号」琴似又市氏のこと〜幕末維新期の札幌とアイヌ社会〜(谷本晃久氏(北海道大学教授))
- 3 696号(8月号) 二つの「モノ」からたどるアイヌ民族の歴史(大坂拓)
- 4 698号(10月号) アイヌの口承文芸(遠藤志保)
- 5 699号(11月号) この秋、二つの展示会への誘い(小川正人)

○これからの掲載予定号とテーマ

- 6 700号(12月号) テーマ：口承文芸(散文説話)
- 7 701号(2022年1月号) テーマ：芸能
- 8 702号(2月号) テーマ：口承文芸(神話)
- 9 704号(4月号) テーマ：アイヌ絵
- 10 705号(5月号) テーマ：口承文芸(英雄叙事詩)
- 11 706号(6月号) テーマ：アイヌ語
- 12 707号(7月号) テーマ：民具

※執筆は第2回(谷本晃久氏)を除き当館アイヌ民族文化研究センター職員



第3回では、石狩や小樽で育った人が遺した祭具に即して、博物館などが行う資料の解説の省察も踏まえながら、人とモノが歩んできた歴史をたどるこ

との大切さを考えています。

連載は全12回。各回の掲載時期と、これまでに掲載した記事及び今後取り上げていく予定のテーマは上記のとおりです。

※『開発こうほう』は道内外の関係機関に送付されているほか、北海道開発協会のウェブサイトから閲覧・ダウンロードすることができます。

<https://www.hkk.or.jp/kouhou/index.html>

■第5回特別展「アイヌ語地名と北海道」の 連続講座・特別フォーラムの講演記録を発行します

当館では、特別展等にあわせて、関連するテーマでの講座・講演会を実施しています。2019年度に開催した第5回特別展「アイヌ語地名と北海道」では、その一環として、各分野の第一線におられる方々を講師とする連続講座とフォーラムを開催いたしました。

たいへん有難いことに、全ての講座・フォーラムに、多くの方々にご参加いただきました。そして毎回のように、参加できなかった方々から、「講座の録画／録音を視聴したい」というご要望をいただきました。参加いただいた方々からも「録音をとっておきたい」

「講義録をまとめてほしい」等のご要望を何度も伺いました。

そこで、当館ではあまり類例のないことですが、連続講座の記録を活字化することといたしました。それぞれの講座・フォーラムの録音を当館で文字起こし、講師の皆様にご適宜補訂していただき、去る9月17日に刊行いたしました。道内の図書館・博物館等に送付するほか、北海道行政情報センターで頒布される予定です。

末尾になりましたが、刊行まで2年近い期間が経過してしまいましたことをお詫び申し上げますとともに、記録

の刊行にご理解とご協力をいただきました講師の皆様をはじめ、第5回特別展とその関連行事の実施にあたりご協力・ご支援を賜りました皆様に、改めてお礼申し上げます。

小川正人(学芸副館長兼

アイヌ民族研究センター長)



活動ダイアリー

2021年6月～2021年8月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

6月19日(土)

■札幌市を対象に「まん延防止等重点措置」の適用のため、臨時休館を7月11日(日)まで延長することを決定。

■ミュージアムカレッジ「アイヌの英雄叙事詩を聞く・うたと言葉」を開催中止。

■特別イベント 映画上映会「北海道開拓記念館ができたころ」を開催中止。

■特別イベント「北海道ジオパークまつり2021」を開催中止。

■アイヌ語講座「アイヌの物語を聞いてみようーマタビのカムイ登場ー」を開催中止。

■チャレンが古文書クラブ③、④を開催中止。

6月29日(火)

■森のチャレンがニュース2021夏号(Vol.24)を刊行。

7月13日(火)

■5月1日からの臨時休館を終了し、開館。



7月13日(火)～7月21日(水)

■第7回特別展「あっちこち湿地～自然と歴史をめぐる旅」を開催(臨時休館に伴い開館日を変更)。



〈第7回特別展 浮島ウォークの体験〉

7月13日(火)

■総合展示クローズアップ展示①、②を展示入替(臨時休館のため、公開日を変更)。

①「近世蝦夷地の古文書」



②「新撰組永倉新八郎の義父 松前藩医杉村介庵」



7月13日(火)～8月15日(日)

■ジオパーク紹介コーナーの設置(7月21日以降、臨時休館)。



7月16日(金)～7月20日(火)

■カルチャルナイト2021の参加。ココガスゴイ! 北海道の恐竜/特別企画展「北海道の恐竜」ダイナソー・小林のギャラリートーク【Chapter1】(YouTube)。

7月17日(土)

■「北海道みんなの日(道みんなの日)」により、総合展示室の無料開放を実施。

■特別イベント「北海道博物館の「建物」の魅力」を開催。担当:鈴木明世。



7月18日(日)

■ミュージアムカレッジ「サハリンの湿地・鳥人」を開催。担当:水島末記・表深太。



7月19日(月)～8月31日(火)

■2021サイエンスパークの参加。特別展「あっちこち湿地」×おうちミュージアム～湿地を学べるコンテンツが集合～(オンライン)。

7月21日(水)

■道による「夏の新型コロナウイルス再拡大防止特別対策の強化」の方針により、臨時休館を8月21日(土)までと決定。

■自然観察会「水辺の生きものをさがそう!」を開催中止。

■チャレンが古文書クラブ⑤、⑥を開催中止。

■子どもワークショップ「アイヌ音楽 うたって・おどって・ならして」を開催中止。

■子どもワークショップ「親子で探検! 森のコレクションをつくろう」を開催中止。

■子どもワークショップ「小さな野球盤づくり」を開催中止。

■特別イベント「夏だ! 海だ! 湿地だ! シッチフェス」を開催中止。

■子どもワークショップ「草原の主・トノサマバッタをさがそう」を開催中止。

■特別イベント 映画上映会「アイヌの昔の家を建てるー記録映像の紹介と解説ー」を開催中止。

7月24日(土)

■道北巡回展「探してみよう! 地域のお宝」(土別市立博物館)開幕。8月22日まで開催。

8月15日(木)～9月20日(日)

■「夏だ! 海だ! 川だ! 湿地だ! 全部まとめてシッチフェス」オンラインの開催。第7回特別展開連イベント。



8月19日(木)

■新型コロナウイルス再拡大防止特別対策の強化延長のため、臨時休館を9月12日(日)まで延長することを決定。

■ミュージアムカレッジ「ウトナイ湖・勇払原野の野鳥と自然」を開催中止。

■総合展示クローズアップ展示②、③、⑤、⑥、⑦を展示入替は、臨時休館終了後に公開(予定)。

②幕末の志士・松浦武四郎が見た、蝦夷地の湿地

③「水」や「湿地」のアイヌ語地名ー山田秀三の地名調査資料からー

⑤木村捷司の壁画「開拓」制作関連資料

⑥たぐじん(北海道拓殖銀行)

⑦アライグマのひみつ

*②、③、⑦は、第7回特別展開連展示。

8月27日(金)

■国の新型コロナウイルス感染拡大「緊急宣言」が適用。9月12日(日)までと決定。

来館者数

○2021年6月～8月(6月1日～7月12日、7月22日～8月31日、臨時休館)
総合展示室 2,296人 特別展示室 1,411人 はっけん広場 0人
○累計(2015年4月～2021年8月)
総合展示室 564,853人 特別展示室 400,141人 はっけん広場 120,784人

森のチャレンがニュース 第25号

発行日:2021年9月29日

編集・発行:北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト <https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2021